

中間學校としての幼稚園

文學士 青木誠四郎

(一)

幼稚園について考へてゆかねばならないことは、種々であつて、またこの各がそれぞれ幼稚園の存在について、その必要を考へしめるものである。或は幼稚園それ自身の独自の立場から考へられるものもある。家庭との關係に於て考へられるものもある。更にまた小學校との關係に於て考へられるものもある。今私は、こゝに、その一つとして家庭と學校との中間にたち、全教育系統中に缺くべからざるものとして、その聯絡をこる幼稚園の機能について、少しく考へて見たいと思ふのである。これ即所謂中間學校である。

(二)

兒童が學齡に達して、就學すると云ふ事實は、その生活にとつて一大變動であるが、こは一般に身體の發育を遅延せしめ、又は阻止すると云はれてゐる。殊に兒童の身體が弱くかつ學校の衛生状態の悪い場

合には、これが著しい、と云ふことである。今是等について研究した二三をあげて見るに、

ボヘミアのルンブルグで、クワースフィールドが研究したところによれば、第一年の死者中その四十六％は、體重が増加せず、二十一％は體重を減少したと云ふ。しかも、第二年では、この増加しないものが、一〇％に減じ、第三年では、八％、第四年では六％に減ずるのを見た。

エンゲルスベルグ及チーグラールは、五歳から六歳の學校兒童凡五百人について、入學當時の體重と入學後二ヶ月の體重とを比較して見たところ、その二〇％だけ體重の減少を見た。

シュミット及センナルドは、學校に入學した兒童と、入學しない兒童との身長、體重の比較をして見たところ、前二氏の研究と同一の傾向を示してゐた即次の如くである。

重量の増加

身長の増加

男 女 男 女

入學しないもの 二・二 一・九 七・四 五・六

入學したいもの 一・五 一・六 四・二 四・六

其差 七・三 三・二 一・一

日本に於ては、まだかくの如き研究をしたものはない。かつて私がある小學校について、各學年の病氣缺席の數をしらべたものがあるが、これは、やゝこの傾向をあらはしてゐる。即

學年 一年 二年 三年

缺席者 一一・五 七・八 七・一

この數は、ある年度に於ける多數生徒の缺席を平均して出したものであつて、大體の傾向は、毎年度同じであるから、その消息を覗ふに足りる。

以上述べたところについて考へるに、これ等は、いづれも、學校生活就中、その規則的生活と、學習の負擔から來るものと考へられる點が多い。シュミットの如きは、就學は、神経系統にショックを與へて幼年兒童の生長を害するものであると云つてゐる。思ふに、兒童は、これまで母の膝下にあつて、束縛のない、そして何等拘束となる様な心的作業をしたことがないのに、一旦學校に入ると、すべてが束縛

をうけ、しかも絶對的に學習、作業が加はるのであるから、この影響がないわけにはゆくまい。

これを要するに、兒童の小學校第一年度に於ける生活は、その健康状態から見て思はしからざるものがあるのである。

(三)

小學校の第一年度に聯絡するものは、幼稚園である。こゝに於てわれ／＼は、いかにこの不健康状態を幼稚園として考へなければならぬかと云ふことに思ひ至るのが當然である。

上述のようにこれ等不健康状態は主として、生活の激變から來てゐることは、やゝ明かなことであるが、小學校の機能(現在の)を果すためには、かゝる強制作業や、規則的生活は、實に已を得ざるものである。そこで、かくの如き、強制の度、規則的生活の度の一層緩なものから、兒童の生活をかゝる生活に馴致せしめる必要が認められるのである。あたかも幼稚園は、家庭と學校との間にあつて、家庭のよくな、全く拘束のない生活から、強制作業を著しく課するよくな學校へゆく、中間の生活をなさしめる機能を果すものとして、所謂中間學校の役にたつも

のである。であるから、他の幼稚園の有する機能として、大切なものはあるであらうが、またこの意味も、充分に考へて、幼稚園の教育をなすべきであると思ふのである。

(四)

さてかゝる機能を果たすために、幼稚園は、どんなことを考へてゐなくてはならないであらうか。

幼児をひきうけて、その保育に任ずるとき、そして、これに對して、上述の様な、生活の順應、訓練をする場合に、その兒童の發育の歴史を知ることが、最も大切なことである。この知られた基礎の上につて、兒童の心身について充分養護の任を果さなくてはならない。

今、一例としてある學校に於ける、尋常一年生の就學前の罹病の状態を見るに次のようである。

| | 男 | | 女 | |
|---------|----|------|----|------|
| | 實數 | % | 實數 | % |
| 1、麻疹 | 二〇 | 八三・〇 | 一七 | 六五・五 |
| 2、百日咳 | 八 | 三三・二 | 一四 | |
| 3、耳疾眼疾 | 六 | 二五・〇 | 四 | 一六・七 |
| 4、疫痢 | 二 | 八・三 | 〇 | 〇 |
| 5、デフテリア | 二 | 八・三 | 三 | 一二・五 |

| | | | | |
|------|---|-----|---|----|
| 6、肺炎 | 〇 | 〇 | 二 | 七七 |
| 7、火傷 | 一 | 四・一 | 二 | 七七 |

かくの如くであるから幼児の中にも多くの病氣をされたものゝあることは明かである。

これ等の病氣も、普通は二回位であるが、多いものは四回にもものぼるものがあるのであつて、かゝる頻回の疾病は、心身共に兒童の發育を害するものである。

これは、一つの例にすぎないが、兒童の就學前の發育の狀況を調べて見ると種々な状態を呈して、決して一様ではない。歩きはじめの時期でも、ものゝ言ひはじめでも、あるひは、乳が母のであるか、人工の乳であるか、齒がいつ生えはじめたか、と云ふ様なことは、いづれも子供によつて、多少とも相違がある。しかも、この相違は、みな兒童の發育の上、それぞれ重要な意味をもつてゐるものである。歩行のおくれたものや、言語のおくれたものは、その心身の發達がわるい。人工乳で育つた兒童は、身體の虚弱なものが多い。と云ふ様に、發育の状態を知らべたいけれども、その兒童の現在の状態についてその如何を見るに足りるものがある。

而して、この心身の發達の兒童による相違を無視して、その心身に相應しない作業を課すると、その結果は、既に述べたような影響が、著しく負擔の過重な兒童にあらはれるのである。

故に、幼稚園に收容する兒童については、入園當時に精しい身體、精神の觀察をなし、この一助として、歩行、言語のはじめ、生齒、榮養の種類(母乳、牛乳等の別)及家族死亡の有無等をはじめとして、諸種の疾病就中、麻疹、百日咳、腫脹腺、恐怖症、胎毒、猩紅熱、チフテリア、又は怪我、火傷の如きについて、詳細の質問をして、その兒童の發育史を知るの要がある。

かくして、著しく發育狀況のわるいもの、例へば罹病の頻回のもの、歩行や言語の著しくおかれてゐるもの等は、或はその作業に於て、或はその遊戯や運動に於て一層注意して、以つて、小學校入學までには遺憾なく準備のできるようにし、更に就學年齢に達しても就學不適當と認めるような場合には、幼稚園自ら就學の猶豫をはかるようにしたいと思ふ。

かくて小學校に入學する前に、發育のおくれたものは勿論、普通のものも、充分の訓練ができ、學校

生活への順應をするに至れば、小學校における、種類の影響は、非常に減ずるよう考へられる。これが、幼稚園が、この中間學校の任務を果すように願ふ所以である。四月からはじまる學期は、近きにある。少しでも幼きもの、ために幸福な生活を祈る心に堪えない。(一、二、三)

鶯

天 行 生

ウグヒスさん

ウグヒスさん

あなたの翼の動きで

東風コチを起して下さいな

ウグヒスさん

ウグヒスさん

あなたの口から四方山へ

春のおとづれ知らせてよ

ウグヒスさん

ウグヒスさん

あなたが飛べば梅は咲き

陽氣な春がついて来る